

第一講 助動詞 I 同形の識別

練習問題

次の文章は『宇治拾遺物語』の一節である。長年清水寺の観音を信仰していた貧しい女は、参籠していたある夜、仏前で「御帳の帷みちやうかたびら（＝仏前に垂らす布）」を授けるというお告げを夢に見た。以下の文章はそれに続く部分である。これを読んで、後の問に答えよ。

夢覚めて、御あかし（注1）の光に見れば、夢のごとく、御帳の帷、たたまれて前にあるを見るに、

「さは、これよりほかに、賜たまべき物のなきにこそあんなれ（注2）」と思ふに、身の程の思ひ知られて、悲しくて申すやう、「これ、¹さらに賜たまはらじ。少しのたよりも候はば、錦をも御帳に

は縫ひて参らせむとこそ思ひ候ふに、この御帳ばかりを賜はりて、まかり出いづべきやうも候はず。返し参らせ候ひなむ」と申して、犬防いぬふせぎの内（注2）にさし入れて置きぬ。

またまどろみ入りたる夢に、「²などさかしくはあるぞ。ただ賜たまばむ物をば賜はらで、かく返し参らす、あやしきこと（注3）なり」とて、また賜はると見る。さて、覚めたるに、また同じやうに前にあれば、泣く泣く返し参らせつ。かやうにしつつ、三度返し奉るに、なほまた返し賜びて、果ての度は、この度返し奉らむは無礼なるべきよしを戒められければ、³かかるとも

〔出典〕

『宇治拾遺物語』

〔重要語句〕

○賜ぶ

○申す

○さらに

○賜はる

○たより

○候ふ

○参らす

○まかり出づ

○など

○さかし

○あやし

○さて

知らざらむ寺僧は、御帳の帷を盗みたと疑はむずらむと思ふも、苦しければ、まだ夜深く、懐に入れてまかり出でにけり。

これをいかにとすべきならむと思ひて、引き広げて見て、着るべき衣きぬもなきに、「さは、これを衣にして着む」と思ふ心つきぬ。これを衣にして着て後、見と見る男おとこにもあれ、女にもあれ、あはれにいとほしきものに思はれて、そぞろなる人の手より、物を多く得てけり。大事なる人のうれへをも、その衣を着て、知らぬえやむごとなき所にも参りて申させければ、必4ず成りけり。かやうにしつつ、人の手より物を得、よき男にも思はれて、たのしく5てぞありける。

されば、その衣をば納めて、必(注3)先途せんとと思ふことの折にぞ、取り出でて着ける。必ずかなひけり。

(注) 1 御あかし——灯明とうみょうの明かり。

2 犬防——僧が読経する内陣と参拜者が座る外陣けじんとを仕切る格子のついたて。

3 先途——事の成否がかかる大事な局面。

○奉る

○なほ

○よし

○いかに

○あはれなり

○いとほし

○そぞろなり

○うれへ

○やむごとなし

○参る

○されば

〔古典常識〕

○御帳

○帷